へ5
4430
2止

特
へ5
4430
2

猿蓑集巻之五

去来

帝國圖書館藏

鳶の羽も刷めぬまつしら雨
一ぬきに見ばえもあるか冬の蝶　芭蕉
股引の朝うしめりけるて　允北
たぬきをそそのかす篠張の弓　史邦
まつ戸々落葉掃出す月　蕉
人ゝのもてなされすな名物乃梨　来

かたきをうる墨流やうく旅寐く　邦
ゝまくらゝんつゝ月の長袋　兆
行春を言の門ハ出つゝあり　来
里ゝんゝ初ゝく年の見ぬく　蕉
ほつまをする去年の移こゝろ　兆
笠蓑ぬゝれのゝゝとちる　邦
吸物ゝ出ん蓑ゝれ笠隠　蕉
三里あゝまゝ此道ゝんける　来

この春を盧同ゝ男居ゝりて　邦
ゝゝ来一ゝゝる月の後夜　兆
笠ゝゝ花ゝ来ゝ水鉢　蕉
ひゝゝ来ゝと鶴の脚ゝ　来
いちゝゝに二日月の喰て　兆
雪をけゝさしゝる鴉北風　邦
史ゝゝに夢ゝ登る雲雀　来
ほゝゝ花皆鳴仕舞ゝ　蕉

痩骨のまゝ起ゐる力なき　邦
陸をとりて車引こむ　北
うき人を枳殼垣ちらんと　蕉
いすゝや別の力ちから出す　来
せつけよ猫てうらをうさちら　北
ゆきもし切るる恋ひとよ　邦
青天よ有明月の絶たりけ　来
湖水の秋乃浅瀬ゆたる　蕉

紫の戸や蕎麦めすまれ歌をよむ　邦
ぬのこ若衆ぬ月秋夕道　北
拝合て寝ゝ八又をつゝむ　蕉
うらもしをの乃まる赤をを　来
一撫鞦つゝる窓のうれ　北
枇杷の古葉ゆにまぶ乃　邦

芭蕉　九
凡兆　九
史邦　九

九兆

市中は物のほしやすき月
あらしふく門々の砧　芭蕉
一番草取り果て種よ蒔く　去来
庚申まちあかす一夜　兆
四筋は銀の刀を持て男色を
たくさんに長き招待　蕉
来

草村の蛙こハ[illegible]

籐乃芽とりに[illegible]　　蕉

道心のおこりハ[illegible]　　来

能登の七尾の冬ハ住うき　　北

魚の骨志ろかる迄の老ぬ　　蕉

待人入て小庫の鐘　　来

立うち扇風を倒す女哉　　北

湯屋ハ竹の簀子俺しる　　蕉

茴香の実を洗ふ家　　来

俤やさしく[illegible]　　北

さる引の猿も春を待顔　　蕉

年に一年の花ざかり　　来

五六本生まつける[illegible]　　北

見送て[illegible]　　蕉

追て早よ泊る乃刀持　　来

てびらら[illegible]　　北

戸障子もむかしの寒殿　蕉
てん窓にまつわいつるつる　乘
こうこと草鞋を作る日頃さ　兆
蚤とるひよ起しの初秋　蕉
ろくまるてこうこの蔦ぐる秋落　乘
ゆうべて蓋のあいぬ米櫃　兆
草庵よ新酒くるるみやから　蕉
いのら城しき撰集ぬる　乘

ゆ
をまくる品ぐるる意を引
陸奥の果て皆小町たち　蕉
あにかろ粥すすもふ　乘
ゆうべとなる尽度　兆
金代しに風這ハする　蕉
かすくるる屋の秋もくさ　乘

芭蕉　十二
去来　十二

厌汁椀の音やさらりさらり　九水

あぶらかすりて寒ぐする秋　芭蕉

彩雲変ずる月のけしき　野水

ゆくへなく蝶の十万さらさら　去来

手代孫へも物を稼ぐ子用て　蕉

学問者にたのしう寒ぐる　水

京都にて鮒よ鱠る春の夕
慶郎うこる和よ世ら氏ら氏ら
中ふ山に行ます吟へハ風薫
蛙の口まねをつまて言葉ふき
言のみまひ笑ふ忘て休む日
連世ら〻き屋ちのまを
金鍔さ人よふ所のやすま
あ川風ぞすまる氏貴く氏月

乗
水
北
蕉
水
乗
蕉
北

町内の秋ふ文物時やふる
仏をあらふ水ちらへ
花ちらる方ハ面会ら衣着て
末ふ氏脈若ふ春ふれつ
名
うへるや〻山陰仏四十ら
紫ふ江家のむ〻をうる
色ふ月あ物ふ陸る北陸
旅の秋ふて有明ふ

すきぼうき女性賀恵もとうとみて　来

何みちしるべ　寝乃ちかく　水

夕月夜器の蓋の花薄　蕉

人もわすれぬあるとのの水　兆

うそつきに自慢いとも遠　水

又もたるみ北鄙を元歩す　来

堤ちり回の音やきていさまし　兆

加茂乃やしろハ独を社なり　蕉

拍子に花屋敷をとくあ来ぶ

雨のやりの北ゝ声迅速　水

屋敷ふる書蹟の花ゝ　蕉

ちるゝ水ゝ蘭しのうらん　兆

糸掛脱いけしもしる暮なら　来

春ものこ三月曙乃うゝ　水

芭蕉　九
野水　九
去来　九

餞乙刃東武行　芭蕉

梅の葉まぢりに見るや冬ごもり
かさあつらへし雪の曙　乙刃
雲雀なく小田より出る五指ばかり　珠碩
まつすぐに植よとてうゑし柳　素男
片隅より虫歯うえて夢の月　刃
二階の客をまねくあさ　蕉

放やうつゝの跡ハ見えもせず　男
編の家迎乃力なきうゝ也　碩
なつかしんで初さこゆる鶯ハ　蕉
四季頭ゝと吟ハ入れ　朶
卯の刻乃簑を毎日見る方　碩
すゝまる杖の志川ゝ　男
萩の札すゝめ机ゝ　朶
花ゝる百吉ゝ一部　智月

懷ゝ月迄あゝる梅の月　九兆
汐さゝまゝぬ舟の海つら　朶
鏡の柄ゝ立すゝるゝ　去来
庚すゝもゝ名すかゝ跡　兆
其日ゝ仕立舞てゝる猛机　正秀
店屋ゝ絲のまゝ　来
汗ぬゝ湯のまゝの糸　半殘
ゝれ出ゝ雞乃下　土芳

大腸よりひとつ出たる蓮　殘
身はあれ葉の取所なき　芳
小刀乃蛤又なる細工　殘
棚よりすす大年の夜　園風
こそこそ行も侍の濁　猿雖
もの合せるかすみ　殘
此方もうれめる破扇　風
碧池移せる自記　雖

ウ
嗅煙の陳ハちりを縁つゝ　芳
係へハうふほとゝぎす顔　風
郭なる強をおひる金盃　蘭
うすきかゝる朱の割下駄　邦
花よりこゝろ吐つまる三日　水
雛の被を巡る毛　紅

乙刃　五
珠碩　三
素男　三
智月　一
凡兆　二
去来　二
正秀　一
半残　四
土芳　三
園風　三
猿雖　二
嵐蘭　一
史邦　一
野水　一
羽紅　一

猿蓑集巻之六

幻住菴記

芭蕉翁

石山の奥、岩角のごとくなる山、国分山と云ふよりは風ふきの名をとりて、山ふかく、樹林茂り、谷流れ落ちて、翠巒天に入る。二曲二百歩、八幡宮、多賀大社の神体、八体陀羅尼の像、唯一の家にて

甚忌嫌事を兩部光明和尚
利益乃塵を同しうしたまふも
又貴し日既たゝんの詣されハ
いとゝ神さびし物ふるる傍よ位
捨し草の戸をとゝまりて根笠新
たなる風をあらし孤狸
の宿なるハ勇士菅沼氏曲水子と
伯父とのあん行を今八年ヶ
しるよ物ゝ石を幻住老人の名を
のこ殘さらるる又市中ゆ出ること
十年計ゆ
ゆ蓬蓬養生の今の色美い蹟年
家ゆ離て奥羽象潟の異景目
下面をとゝ高するこあるを
たゝき北海の荒磯よりひ出

破らんと歳湖水の波よ深傷の
浮巣の流れ[illegible]一本
乃陰[illegible]軒端[illegible]
[illegible]切[illegible]月
初いとうめに入[illegible]山のやうに出
しとさへ[illegible]
の名残も[illegible]
山霧[illegible]

狂宿[illegible]
の[illegible]
[illegible]眞[illegible]て颯吳楚東
南[illegible]身ハ津江湖[illegible]
山[illegible]東中[illegible]
[illegible]南薫[illegible]
北風[illegible]
[illegible]日枝の山[illegible]
[illegible]の私[illegible]
[illegible]

木樵の琴舞の小男早苗とる
音楽を[illegible]水鶏[illegible]
和音義景地[illegible]と云事
[illegible]中の三上山八幡宮[illegible]
[illegible]て武義[illegible]古事掛もなし
いて[illegible]田上山[illegible]古人を[illegible]
[illegible]山嶽千丈の峯[illegible]黒
津の里いと[illegible]て[illegible]

まるとまんまるの[illegible]
[illegible]跳[illegible]
[illegible]遠のほり私の[illegible]作業の国産
[illegible]掛と名付[illegible]
[illegible]主[illegible]
[illegible]王翁除[illegible]の徒[illegible]唯聽
辟山民と[illegible]屠顔[illegible]
[illegible]空山[illegible]風[illegible]

くゝ心すまんかるゝ時て谷の清水を
汲てゝ自ら炊ぎてゝの手ずから
一炉の傍へいとまもなく昔住さんかの
所よんでゝ住かてゝ自くみを
る地すきこそ形ち拓佛一向を踏て夜
の地ずもしへるこそ変たるいさゝか
つゝきぶを繋ぎ飯繋ぎる所山の住ひを
かゝ蔵の中数住ゝ嚴子とて侍し

洛よのほとりまでうゝ者ある人を
して額をとゝとやとゝと尋ぬ
漸ゝ幻住庵のこ富を遂ゝ形て
草庵の記念をかゝすへて山居を
いとい旅寝こゝ云ける器をとゝ
ゝ形 木曽の稀豆越の変義に
枕のとゝ程よ鳥ゝ昼ハ稀ゝとゝ
ぬへゝよんを動ゝあるハ宮寺の扇

里の行のこと入事ていの事乃稲
ゝしあゝ宮の豆畑ようよのわ
家内まゝぬ農業日既よ山の端よ
ゝまゝ夜屋鶏よ月を待てハ
新を付し燭を取て岡雨よ長飛
をゝゝすゝいゝゝてゝゝぬるよ
深霧をあゝ山野よ路をかくさ森
とゝあゝ病人よ伴て走

をいゝゝ人よ伴ゝ情年月よ
稼ゝ独を身し称を地ゝよ
あゝ所を仕官無命ゝ地をゝゝ
やゝ一ゝしい佛離祖室の扉よ入
ら雲ゝ也ゝ多ゝゝなゝ風を
よ月を世あゝ花鳥ゝ情を易して
暫ゝ生涯のゝゝ事をゝへのれゝ
孫よ世孤無月ゝて世一筋よ不

[illegible]樂天八五縣〻神を[illegible]ふる老拙
[illegible]愚文質の[illegible]
[illegible]幻の[illegible]
[illegible]

題芭蕉翁國分山
幻住菴記之後

何世無隱士以心隱為賢
也何處無山川風景因人
義也間讀芭蕉翁幻住菴
記乃識其賢且知山川得
其人而益義矣可謂人与
山川共相得焉遂作鄙章
一篇歌之曰

琵湖南兮國分嶺

古叢鬱芳緑陰清
茅屋竹樣繞數間
内有佳人獨養生
滿口錦繡輝山川
風景依稀入詩城
此地自古富勝覽
今日因君尚益榮

元禄庚午仲秋日　震軒具州

几右日記

曲水
野水
去来
凡兆
千那
珠碩

時雨背中乃ん下る群鶴もれ
ふりもえの跡ふるやふるのこ
鶏もしらぬ時ふる鶴なく
海ゑ五月雨ふる日一ふる
軒ちかき岩梨ぬれ猿のあ
頭脛のやもめ文のやま

贈紙帳

野徑

里東

膳所 乙刀

怒誰

探志

元志

膳所 泥土

史邦

正秀

立人 柳陰

如行

膳所 朴水

義濃巫井 市隠

半殘

麦乃穂を出産す

一袋これや鳥羽田のとも麦　之道

書音

一隻入るゝ山さハらや隠るゝ　長崎　魯町

夕立や稿木の奥ハ一ましり　及肩

罪徒絵掛

稿しゆや田よりたゝるゝ　高白

贈蓑

ましるみのゝ糸　北枝

木履ゆゝ倩ふゝ蓑ハ　木節

包紙より書

猛るゝ業俵や莊の露　膳所　扇

稲のふゝしを佛ハ土産ハ　智月

石山やゆゝ果ハ姉の風　羽紅

猶の輪やこれて明るむ　昌房

里ハいまゝ夕ゝとゝあつゝ　何処

啼やいく塩ほろ〳〵と　越人

越人と同じく訪合て

墓の宮ゝ佛よ見入菴哉　等哉

明年弥生尋問菴

春毎やあるじ問ふ人ぞ　嵐蘭

同艮

涼さを人住ぬ　曾良

跋

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首謔也非比彼山寺偷衣朝市頂冠笑只任心感物写興而已矣洛下逸人凡兆去来随翁遊学棋館竹窓躍等淩節斯有歳屬撰此集玩弄無已自謂絶超狐腋白裘者也於是四方嗤笑憧々往

来或千里寄書々中皆有佳句
日蘊月隆各程文章然有昆仲
騷士不集録者索居竄栖為難
通信且有旄倪婦人不琢磨者
兼言細語為喜同志雖無至其
域何乗其人乎哉果分四序作
六卷故不遑廣捜他家文林也
維時元禄四稔辛未仲春余掛
錫於洛陽旅亭偶會兆来吟席
見需記此支題昏尾卒援毫不
揣拙庶幾丁蓑高張有補于詞
海漁人云

風狂野衲
文艸漢書
正竹書之

京寺町二条上ル
井筒屋庄兵衛板